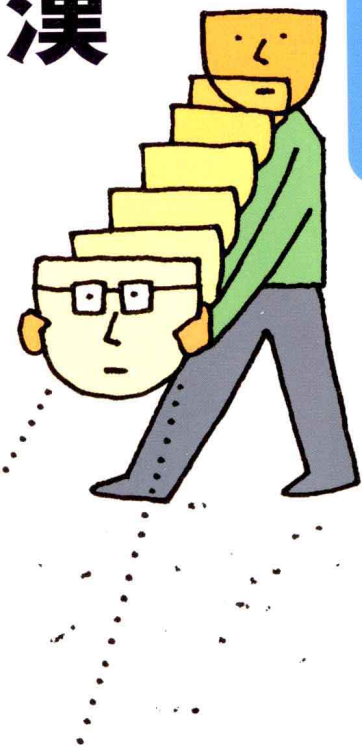


だま

騙しても まだまだ騙せる 日本人

だま

君は中国人を知らなさすぎる



邱永漢



だま だま にほんじん
騙してもまだまだ騙せる日本人 君は中国人を知らなさをさぐる
きゅう えいかん
邱 永漢

2002年 7月15日 初版 1 刷発行

2006年 4月15日 2 刷発行

発行者—古谷俊勝

印刷所—豊国印刷

製本所—明泉堂製本

発行所—株式会社光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 編集部(03)5395-8282

販売部(03)5395-8114

業務部(03)5395-8125

振替 00160-3-115347

©eikan KYŪ 2002

落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。

ISBN4-334-78170-5 Printed in Japan

☐本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

だま
騙してもまだだま
騙せる日本人

君は中国人を知らなさすぎる

邱 永漢



光文社

まえがき

世界の人口の四人に一人が中国人だから、それこそ道端で石ころを蹴ったら中国人にあたると言っても決して誇張ではない。その中国人がずっと下積みになっているのなら、さして問題にならないが、今回のアジアの通貨不安のさなかにあつて、中国大陆がさほど影響を受けないですんだ。その協力を得べくアメリカがすり寄っているのを見ても、中国の経済発展が既成事実になりつつあることは誰の目にもはつきりしている。

日本として立場はアメリカとさして変わらない。カネとモノの動きが地球的規模になりつつある中で、世界を相手の商売をやろうと思えば、中国に生産基地をつくることも、中国のマーケットを開発することも避けられない方向だし、東南アジアの経済の立て直しをやるにあたっても、華僑の協力なしに事はうまく運ばない。そういうことは民間企業の方が政府よりはよくわかっているから、日本の企業も次々と中国に進出

しているし、東南アジアで華僑と協力して事業を進めている。

ところが、そうした企業進出が必ずしも順調に推移しているとは言えず、大赤字になったり、倒産寸前まで追い込まれている例が最近しきりに報道されるようになった。それほど切羽詰まった状況になくとも、進出企業が四苦八苦している話はよく耳にする。現に私でさえも似たような境遇におかれている。だから海外進出や異国での経済活動はもともとそう簡単なものでないことがわかる。

しかし、進出したからには障害になっているような難題はどうしても解決しなければならぬし、またそれを解決した者が次の時代の雄となる。そうした崖っぷちにおかれた者から見ると、商売そのものの難しさもあるけれど多国籍にまたがって事業を展開する上で、パートナーになったり、顧客になってくれるその国の人々に対する理解の不足に起因している面が大きい。歴史や文化や国民性の違う国に行って仕事をするのに、自分の国の物差しを持って行って測ること自体に無理があるのである。

日本人は信用を重んずる。日本人の信用の尺度で測ると中国人は平気で嘘をつくし、約束も守らない。では中国人は信用を重んじないかというと、中国人も信用を重んずる。中国人に言わせると日本人は前任者と後任者とは言うことが違う。会社の方針が変わる時は言うこともクルクル変わる。だから日本人は信義を守らないと中国人は

考える。その違いはどこから来るかという、お互いに相手の考え方を理解せず、自分らの物差しで物事を測ろうとするからである。

しかし、お互いにこれだけ一緒になるチャンスがふえてトラブルが続出するようになると、双方ともどこに問題があるかだんだんわかってきた。中国人とうまくやっていくためには中国人をよく知らなければならない。そのためには中国人の国民性や生活習慣を理解する必要がある。というわけで巷間「中国人とうまくつきあう法」に類した本が目立つようになってきた。私のこの本も「中国人とつきあう法」と題して一九九六年八月号から一九九八年七月号まで『実業の日本』誌に連載したものである。執筆中、絶えず頭にあったのは、どうしたら日中合作の企業を失敗に導かないようにすることができるとのことであった。その観点からすると、中国大陆に進出して現に駐在員をつとめている人たちは何回も何回も自分の周囲の中国人に手を焼いて騙されたという被害者意識を持っている。

この本の最後の件でも述べたが、上海の日本人会の川柳大会で一等賞になったのは「騙してもまだまだ騙せる日本人」という一句だったそうだから、これこそ現地駐在員たちに共通の実感と言ってよいだろう。ならばそこから出発するのもよいだろうと考えて、単行本にするにあたって、このタイトルに改めた。誰のつくった川柳かわか

らないが、いかにもワサビのきいた一句なのでタイトルに使わせていただいた。

一九九八年六月吉日

邱永漢（北京寓居にて）

騙^{だま}してもまだ騙^{だま}せる日本人……………【目次】

第一章	知つてはじめて中国人を知らなかったことを知る	11
-----	------------------------	----

第二章	日本人の中国観は三転して今度が四回目	21
-----	--------------------	----

第三章	中国に夫婦茶碗のような男女の区別はない	31
-----	---------------------	----

第四章	中国は家族主義の上に築かれた社会である	41
-----	---------------------	----

第五章	錢には細かいが血も涙もある国民性	51
-----	------------------	----

第六章	なぜ中国人は個人の交際を優先させるか	61
-----	--------------------	----

第七章	中国人の会社は日本の会社とこれだけ違う	72
-----	---------------------	----

第八章	中国人の会社勤めはタダの腰掛け	82
-----	-----------------	----

第九章 訓練と規則とお金の払い方が大切 92

第十章 日系企業に現地人幹部が育たないわけ 102

第十一章 愛国心はあっても政府を信用しない人たち 113

第十二章 中国人ほど脱サウの好きな国民はない 123

第十三章 喧嘩のあとに信頼関係が生まれる 133

第十四章 利害の一致が「親戚づきあい」の大前提 143

第十五章 公德心の欠如にどう対処するか 153

第十六章 工業的センスは若い人の訓練から 163

第十七章 国有制度ほど中国人に不似合いのものはない 173

第十八章 株式会社化でふえた合作のチャンス 183

第十九章 商業資本的発想とうまく噛み合うか 193

第二十章 工業生産でも中国人から学ぶことがある 203

第二十一章 嘘と法外な要求とピンハネに驚くな 213

第二十二章 コピーストが使いこなせたら中国通 223

第二十三章 お金の回収がきたら一流セールスマン 233

第二十四章 騙^{だま}してもまだまだ騙^{だま}せる日本人 243

第一章 知つてはじめて中国人を知らなかつたことを知る

日本の精神文化はほとんどが「舶来」

あなたがはじめて中国人と知り合いになったとしよう。どこで、どうやって、どういう人とめぐり合うかは人によってそれぞれ違うが、中国人と知り合いになる確率はきわめて高い。中国大陸に住む中国人だけでも十二億人とも十三億人とも言われ、一

人つ子政策がこのまま厳守されても、二〇一七年には十五億人に、さらに二〇四五年には十六億六千万人にふえるという人口統計ができあがっている。

中国大陸以外で、華人の仲間に数えられるのは台湾の二千百万人と香港・澳門^{マカオ}の六百万人、それにほぼ匹敵する約二千七百万人のいわゆる華僑も含めると、約五千四百万人が世界中に分散して住んでいる。世界中の人口の四人に一人が中国人だから、出会った四人のうち一人が中国人ということになる。

もちろん、日本人の中には一生に一度も外国に行ったこともなく、外国人と言葉を交わしたことがないという人もいるだろう。しかし、帝国主義時代の日本人は、朝鮮半島や台湾を自分らの版図にしていたし、満州事変後、大東亜戦争までにも、何百万人ももの若い人が兵隊として外地に渡ったり、開拓民としてよその国に移民したりしたから、少なくとも戦争を通じて日本人以外の人たちと接するチャンスには恵まれた。面白いことに日本人は勝つても負けても、戦争をすると、戦争をした相手から激しい影響を受ける。日清戦争で清朝を打ち負かした時は、それまで「眠れる獅子」と思っていたのが実は「死せる豚」であることを発見して、すべての中国人を清国奴とバカにするようになったが、これは長い間抱いてきた畏敬の念を裏がえしにして見せたようなものである。

日露戦争で帝政ロシアを打ち負かしたあと、ロシア革命が起つてソビエト・ロシアができる、日本の知識階級は信じられないくらい激しく共産主義に傾倒した。エリートの中には真面目で理想に燃えていたがために左翼化し、官憲の追及にあつてひどい目にあわされた若い人がどれだけいたか、左翼文学の歴史をひもといてみるまでもない。

満州事変後、日本軍が東北三省をはじめ、中国大陆に進軍するようになると、軍人たちは日本の神社やキモノまで大陸に持ち込んだが、日本では逆に中国の流行歌が一世を風靡した。「何日君再来」はもちろん、中国の歌謡曲だが、「支那の夜」や「蘇州夜曲」は日本人のつくった中国の歌である。そういうところが日本人のすばしいところで、外国のオリジナルをいつの間にか自家薬籠中のものにして売り出すのが日本人の最も得意とするところであり、いまでも「支那の夜」と「何日君再来」のどれが日本人の作曲したもので、どれが中国人の作曲したものかわからない中国人はたくさんいる。占領した国のメロディが日本で大流行をし、日本のキモノも茶道も中国大陆ではさっぱりうけなかったのである。

戦後の日本は一転して敗戦国になったが、今度は日本を打ち負かしたアメリカの文化が日本人の頭のとっぺんから足の先まで覆いつくしてしまった。有史以来、日本が

はじめて戦争に負けたわけだが、負けても勝つても戦争をした相手の影響を激しく受けるところに日本人の特徴がある。

もともと日本人が外国文化の影響を受けるのは何も戦争を通じてだけではない。戦争になると、戦う相手と接するチャンスがふえるので、その分、影響が大きいというだけのことであつて、日本文化そのものがもとをただせば、ほとんどが舶来文化なのである。

明治維新までの日本は中国文化の影響を最も強く受けており、人の往来や物の交易を通じて、それこそ漢字から儒教、忠君愛国の精神まで日本文化の骨格をなすものはほとんど中国大陆から、あるいは朝鮮半島を通じて、あるいは柳田国男の言う「海上の道」を通じて、日本に輸入されてきたものである。

交易と往来を広げた「海上の道」

そういった意味では日本人にとって中国人ほかかわりの深い国民は他にいない。もちろん、一衣帯水の彼方にある朝鮮半島とは歴史的にも数々の不幸な出来事があり、恐らく人の往来も激しかっただろうから、人種的にもつながりは深かったと思われる。

しかし、もし「海上の道」が今日、我々が想像するよりもずっと利用度の激しかったものであったとすれば、日本と華南一帯、あるいは台湾、フィリピン、ボルネオからベトナムまでの東南アジアとのつながりの方がもっとずっと強かったことが考えられる。

現に日本の遣唐使は寧波より南の港に多く上陸しており、弘法大師の記念碑がいまも福州に建てられている。潮に乗って下ると、日本から出た船は、大連や青島に行くよりも上海からずっと南に着くようになっており、同じように、泉州や漳州や広州から北に向かう船は、九州とか四国に着く流れになっていたのである。

たとえば鄭成功は父親の鄭芝龍が日本に住んでいた時に、平戸の田嶋という家の娘との間に生まれた子供ということになっているが、鄭芝龍といえば、南シナ海を暴れまわった海賊の頭目であり、のちに明朝が清の攻撃にあつて屋台骨の傾いた時に助けを求めて大將軍に引き立てたいきさつがある。

その鄭芝龍がどうして長崎に居を構えていたかという点、華南一帯で海を縄張りとした組織のボスたちは華南から九州までを行ったり来たりして商売をやっており、海上で弱い相手を見たら海賊に早変わりするような生活を送っていたに違いない。ちょうどイギリスやノルウェーの貿易船がついでに海賊まがいの略奪を兼業していたのと